

復興のその先に向けたコミュニティ・デザイン——あすと長町仮設住宅(仙台市)での取り組み

Community Design toward an Even Further Point of Recovery

——Tomorrow and the Efforts at Nagamachi Temporary Housing in Sendai

新井信幸

Nobuyuki Arai

東北工業大学工学部建築学科講師 / 1972年神奈川県川崎市生まれ。千葉大学博士課程修了。建築計画、住まいまちづくり。

(財)ハウジングアンドコミュニティ財団・研究員を経て現職。学術博士(Ph.D.)

仮設住宅は被災者の受け皿としてだけでなく、生活再建への着実なプロセスであるとともに、地域で暮らすことへの意欲を高める場となることを筆者は望んでいる。それは復興公営住宅¹もまた然りである。ここでは、そんなスタンスで取り組んでいる「あすと長町仮設住宅(以下、あすと仮設)」での仮設から本設に向けた支援活動とコミュニティの内実を紹介する。

あすと長町仮設住宅

あすと仮設は、仙台市内最大の233戸の仮設住宅団地である(図1)。当初仙台市は高齢者の孤立を防ぐ目的で、1組10世帯以上での入居を原則としていた。しかし、それ自体がネックとなり、1次募集時には25世帯のみの入居にとどまった。その後、段階的に入居条件が緩和され、8月の3次募集時にほぼ全戸が埋まることとなったが、その多くは高齢者世帯の単独入居で、グループでの入居は5組だけであった。さらに、気仙沼、南三陸、石巻、南相馬等、遠方からの転居がかなりの数を占めていた。こうしてあすと仮設は、多地域から寄せ集まった見知らぬ者同士の住処となった。そのため、初期のころはゴミ出しや駐車位置等で些細なトラブルが頻発していた。それでも8月になって、5グループが中心となって自治組織が結成された。

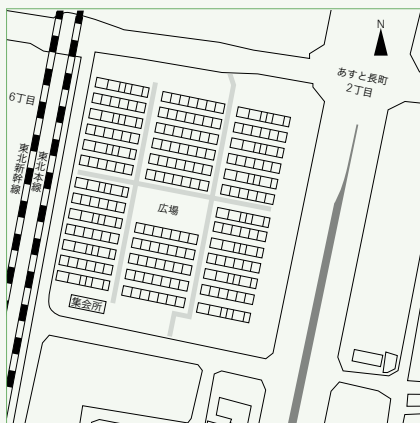


図1 | あすと長町仮設住宅敷地図

軒先での作業がコミュニケーションのきっかけに

筆者のあすと仮設とのかかわりは、震災から約2カ月が経ったころ、地元まちづくりNPOが主催した「ふれあいサロン」に参加したのがきっかけであった。そこで仮設居住者の方に「収納が少なくて困っている」と聞かされたことから、学生たちと軒先収納づくりを始めることにした。間もなく「仮設カスタマイズお助け隊」を結成し、現在までに軒先収納十数台、縁台50台程度、室内棚等の設置50軒以上等を手がけた(図2・3)。やがて他の仮設住宅からも呼びがかかるようになり、大船渡、南三陸、石巻、東松島、塩竈、名取の計7団地にも訪問して収納・縁台づくりを実施した。

この活動は「つくってあげる」ことよりも、「軒先に出ていっしょにつくろう」と参加を促すことを大事にしており、同時に屋台カフェも実施している。収納等は注文のあったお宅の軒先や通路端、広場で制作している。そんな折、きまっご近所さんや散歩中の人々が覗きに来て「何ができるの?」「うちにもつくってくれるの?」と声をかけてきてくれる。真夏の炎天下での作業を気にかけて、「かぶりなさい」と帽子を持ってきてくれた老夫婦もいた。家に閉じこもりがちなお父さんたちも、口出しから始まって、結局、手を出してくる。軒先での作業自体がコミュニケーションのきっかけになるとは思ってもみなかったのが、意外な発見であった(図4)。



図2 | 軒先収納第1号[図2-6 筆者撮影]



図3 | 軒先で収納を制作する学生たち



図4 | 屋台カフェの傍らで緑台づくり



図5 | ワークショップでの復興公営住宅の検討



図6 | 広場で復興公営住宅づくり展示

共助型コミュニティが育まれる

あすと仮設は、利便性の高いところに立地していることもあって、外部からの支援者が絶えず訪れ、ほぼ毎日、音楽イベント、書道や編み物等の趣味の教室、マッサージのボランティア等が開催されている。そのため集会所は月に50組以上の利用があり、1カ月先まで予約でいっぱいである。そうした外部からの支援に触発され、居住者同士でも、ラジオ体操、内職、農園、ペット、仏会話、陶芸等のクラブ活動を始めるようになり、自治会役員を中心に楽しみ合いながら支え合う関係が生成している。さらには居住者同士の結婚という出来事まで発生し、あすと仮設はますます活気に溢れている。こうした状況は、自治会役員の方々のオープンマインドな気質によるところも大きく、初代自治会長を務めた鈴木良一さん(69歳)は「来るものは拒みません」と、どんな支援も笑顔で受け入れていた。

住民主導の復興公営住宅づくり

震災から1年が経って、筆者はあすと仮設で育まれた楽しみ合いながら支え合う関係が、その先の復興公営住宅にも引き継がれるべきと考えるようになった。しかし、同時に、多地域から集まってきた状態ではそれは難しいこともわかっていた。そんななか、二代目会長の飯塚正広さん(50歳)から「せっかく育まれたコミュニティなのだから残していきたいし、高齢者が安心して暮らせる環境をつくってほしい」と協力を要請があった。こうして、2012年4月から筆者ら住まいまちづくり専門家グループ²でサポートを開始し、数回の学習会を重ねた後に、コミュニティを継承できる復興公営住宅の計画提案づくりを住民主導で展開していくことになった。6月からはほぼ毎月公開ワークショップを開催し、そこでの成果をもとに、ただいま計画案を練っているところである(図5・6)。

一方、仙台市では第2期の復興公営住宅1380戸の建設計画を公募買取方式で進めている。公募買取方式とは、民間事業者が計画提案して建設したものを市が買い取るもので、あすと仮設でもこの仕組みを使って計画提案

を実現させようと画策している。現段階では、仮設が建っている敷地の駐車スペースに120戸程度の集合住宅を建てて、そこに入居する人と仮設に残る人が一体のコミュニティのまま、自治運営を継続できるようにしたいと考えている。さらに、時代の要請でもある「シェア居住」に対応すべく、コモンミールやコミュニティカフェのできる共用のリビング・ダイニング等を設けることを検討している。加えて、ソフト面の充実をはかるため、お試しコモンミールの開催やコレクティブハウジングの見学会等も予定している。

復興のその先へ

あすと仮設では、期せずして寄せ集まった人々が、外部からの支援を受けながら数多くの新鮮なコミュニケーションと出会い、その積み重ねによって共助型コミュニティと復興へのエネルギーを生み出していった。これらのプロセスは、コミュニティ・デザインの視点から大変意義深いものがあると感じている。その反面、これまでトラブルも少なくなかった。アルコール依存の居住者による傷害事件が2件、さらに親子間の殺人未遂まで起こった。ストレスがたまりやすい復興のプロセスでは、今後も大なり小なりトラブルは発生していくであろう。それでも閉じずにオープンに構えて外部と適度につながっていくことで、復興のその先も楽しみ合いながら支え合う関係が維持していけるような気がしている。

あすと仮設は、復興のその先の日常に向かっていく。そのためのコミュニティ・デザインを仮設支援のスタンダードとしていきたいものだ。

注

1. 災害公営住宅のことであるが、仙台市では復興公営住宅と呼んでおり、響きがいいので筆者もそう呼んでいる。
2. あすと仮設の復興住宅プロジェクトに参加している住まいまちづくり専門家は、筆者以外に、CASEまちづくり研究所・松富謙一氏、東北工業大学・小杉学氏、横浜国立大学・藤岡泰寛氏等である。

参考URL

- A. トウホク復興ブログ(筆者の取組み等を紹介)
<http://ameblo.jp/no-arai/>